大人のための異文童話集16　月天使かぐや

天野久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大人のための異文童話集１６　月天使かぐや

【Ｎコード】
Ｎ１２２９Ｎ

【作者名】
天野久遠

【あらすじ】
竹取物語というお話しは、子どもたちだけのモノではないはずで、大人のお話しにしてみると、こうした切ない物語なのではないかと…。

（前書き）

ＢＧＭには伴都美子の“鵺の鳴く夜”などがいいと思いますね。

なぜ私は月を見て泣くのでしょう。
時に切なくなり、時に暖かくなり、私に向かって悲喜こもごもな姿を見せる、あの月にどうして…私は惹かれてしまうのでしょう。

満る月の姿見は、私にはとても切なくて、そして、儚いものに思えてしまう。
朔たるは、何故か私に安堵と安らぎをもたらしてくれる。
弓張りの月を見て、心がざわめいて落ち着きを無くしてしまう私は…、誰？

女は今宵も月を見ながら、そう言っては涙を流すのでした。
それまで黙って傍にいた男は、ゆっくりと口を開きました。

「かぐや、私はお前に話しておかなくては…ならないことがあります。」

男はそっと、かぐやと呼ばれた女の長く美しい黒髪を撫でながら、ポツリとそう呟きました。
その声にはどこか元気がなく、物悲しさ帯びているようでした。

「此方様。お話し…それはいったいどのようなことでしょう？」
「そのお話しと言うのは、私が先ほどまで想っていたことに関係があるのですか？」

美しいだけではなく、賢くて察しのいいかぐやと呼ばれた女は、男の語り口だけでそう感じ取ったのです。

「薄々は…お前も気付いていることでしょう。」
「そしてそのときがもう直、やって来るということも…」
男はそこまでいうと言葉に詰まりました。
かぐやと呼ばれた女は、そのとき見せた男の顔を生涯忘れないでしょう。
女はいままで、これほどまでに切なく、寂しく、そして絶望に満ちた表情を、見たことがありませんでしたから。
「此の君より産まれ出でたとのこと…」
また男がポツリと呟きました。
「ええ?」
その声はとても小さく、はっきりと聞き取ることが難しかったため、かぐやと呼ばれた女は聞き直したのです。
しかし男はそのまま話を続けるのでした。
「嘘か誠かは、私にもはっきりとはわかりません。」
「いや、きっとそのようなこと…」
「これまでは嘘に決まっていると思っていました。」
「しかし、最近のお前の様子を見ていると、もしや真なのかと…私はそう思い始めたのです。」
かぐやと呼ばれた女には、最初に言った男の言葉がよく聞き取れなかったため、男の話していることがよく掴めません。
それよりも、傍でそう話してくれる男の気持ちの辛さだけが、自分の胸さえも締め付けるほど、とても苦しいものだと感じるのでした。

「かぐや、どこにも行かないでおくれ。」

そう言って男は、しっかりと女の肩を抱き寄せるのでした。
今度はかぐやと呼ばれた女にも、はっきりと聞き取れました。
それはこれ以上にはないというほどの、切望と懇願が込められた男の言葉でした。

「いったい…今宵の此方様はどうしてしまわれたの？」
「私は決してどこへも行きはしません。」
「いつまでもずっとこうして、此方様の傍におります。」

そう言ってかぐやと呼ばれた女は、自分の肩に当てている男の手を、しっかりと握りしめました。
それは仲秋の名月が訪れる、少し前の宵のことでした。

空には下弦の月が見えています。

「はぁ…」

今宵も男はひとり、夜空を仰ぎ見ては力なく溜息をついていました。

「やはりこんな私では、お前を繋ぎ止めることなど出来なかったのですね。」

男は月に向かって寂しそうにそう呟きました。

「此方様ごめんなさいね。私は最初から何もかも分かっていたのです。」
「だから、いよいよという時が近付くと、私はああして、毎夜、

月を眺めては…」
「そして今夜、とうとう十五夜がやって来ました。」
「あのお話をして後、それでも私は此方様と伴の床を頂くことが叶わず…」
女はそう言うと、ひと粒、頬に涙を流したのでした。
「あなたといつまでも、一緒に暮らしたかった。」
そう言われて男は、女をしっかりと抱き締めました。
それは、かぐやと呼ばれた女を決して放さないという、強い意思の込められたものでした。
「かぐや、どこにも行かないでおくれ。」
「私をまた独りぼっちにはしないでおくれ。」
それを聞くと、かぐやと呼ばれた女は、更に続く涙を堪えるかのように、天を仰いで言いました。
「既に…お使者がやって来ております。」
「もう、どうにもならないことなのです。」
「分かってください…私の愛おしい此方様。」
「女としての悦びが叶わなかった今、こうして月に戻るしかないのです。」
「そして再び…舞い降りた処が、此方様のもとであれば…」
かぐやと呼ばれた女はそう言い残して、男のもとから消え去ったのでした。
それから数日後、

男は、かぐやと呼んだ女の後を追うようにして、その寂しさから命を断ちました。

「月天子。……かぐや。」

それが、最後に男の残した言葉だったということです。

（後書き）

久々の更新で、それもかなり早い『十五夜』がテーマとは、ほとほと間の抜けた気もしますが、それもまた私らしくて一興とも思えます。

ケータイのみでは、たぶん読めない事が残念なのですが、私のホームページの方でも、新たにシリーズ童話や連載小説を始めているので、それに伴っての更新です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1229n/

大人のための異文童話集16　月天使かぐや

2010年10月22日00時16分発行